政令指定都市・区制移行30周年

つなぐ。仙台

今月のテーマ

「子育て」

政令指定都市・区制移行30周年に当たり、さまざまなテーマに沿って、これまでを振り返り、これからを展開していきます。

これまで

子育て支援の取り組み

本市の10歳未満の子どもの数は、平成21年の約9万1千人から、平成30年は約8万9千人となり、年々減少しています。少子化や世帯構成の変化、働き方の多様化が進み、子育て環境は複雑化、多様化しています。

本市では、区役所・総合支所を中心に母子保健事業や子育て支援に取り組み、1月には医療機関等で必要なサポートを行う「産後ケア事業」を開始するなど、妊娠期から出産・子育て期にわたる切れ目のない支援のさらなる充実を図っています。

また、保育所等の保育基盤の整備や保育サービスの充実に取り組むとともに、小学校区単位を基本とした児童館の整備を推進。子育てを総合的に支援する「のびすく」の各区への整備や、保育所等において育児相談や講座開催などを行う地域子育て支援事業の実施など、地域で安心して子育てできる環境づくりを進めてきました。

社会全体で子どもの健やかな育ちを見守り、支えていく仕組みづくりも進めており、平成30年には子ども食堂への助成を開始するなど、子どもの居場所づくりにも取り組んでいます。

子どもたちは地域の未来への希望です。家庭、地域などと相互に協力し連帯感を深めながら、子どもを産み育てたいと思える地域社会を目指します。

在仙のイラストレーターの佐藤ジュンコさんが、取材時のこぼれ話をお伝えしていきます

インタビュー

子育て支援を通した地域の居場所づくり

平成 28 年９月に始動した「おりざの食卓」（太白区）は、孤食になりがちな子どもや高齢者が一緒に夕食をとれる場所。栄養バランスの取れた食事を用意し、昔の大家族のようにみんなで食卓を囲むお手伝いをしています。

立ち上げのきっかけは、地域の子育て支援に関わる人を対象にした太白区主催のセミナー。主任児童委員を務める私も参加し、そこで「子ども食堂」の存在を知りました。ひとり親・共働き家庭などの子どもが一人寂しく食事する現状が太白区にもあるということで、料理教室を長年運営してきた私自身の経験を生かし、子ども食堂のような夕食支援を行うことにしたのです。

「おりざの食卓」を始めてから２年半で、利用者の延べ人数は 3,000 人超に。現在は週２回の開催で、３歳から80歳代までご利用いただいています。ここで大切にしているのは、家庭的な雰囲気。子どもたちは学校から帰ってくると、調理ボランティアさんがご飯を作る音や匂いを感じながら、学生ボランティアさんと一緒に宿題をします。また夕食後には会話の時間を設け、多世代で交流。こうした環境の中で、基本的な生活習慣や社会性も養ってほしいと願っています。実際に

ご飯までの時間は学生ボランティアに宿題を見てもらったり遊んでもらったり。この学生たちが子どもたちの身近な目標にもなる

「人見知りが改善した」、「学習の習慣が身に付いた」、「野菜嫌いを克服した」など、変化が見られる子どもも多いです。

活動を続けるにつれて、このような場所を求めているのは子どもと高齢者だけではないことも分かってきました。子育てに悩む保護者をはじめ、転勤族で近所に知り合いがいない方、社会復帰のステップとして調理ボランティアに参加する方など、利用者の年代や理由はさまざま。核家族が増え、地域でのコミュニケーションが希薄になっている今、孤立しそうな時に頼れる場所が必要です。誰もが気軽に立ち寄れる「地域の居場所」づくりが、子育てしやすいまちづくりにもつながると実感しています。

特定非営利活動法人 おりざの家 理事長
佐藤 宏美さん

■プロフィール／平成8年に料理教室を開き、平成28年から「おりざの食卓」として家族支援を展開。主任児童委員を務めるほか、食養生コーディネーター、家族相談士としても活躍